へ13
2378
254

へ達39特
2378
25カ

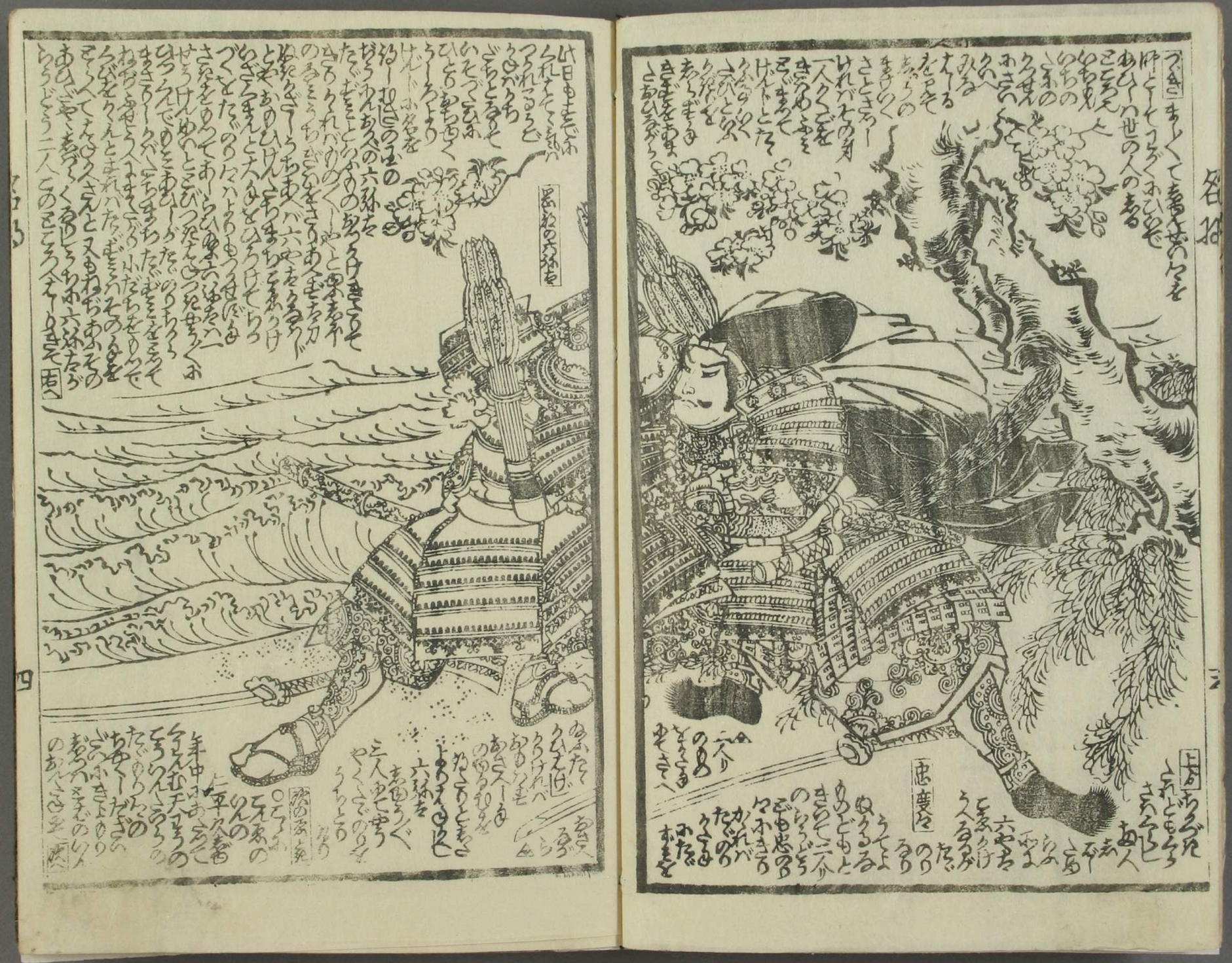
只曹不興屏風とゐぐくゐ誤て墨落其墨を畫て蠅とせり貞信公扇ゐ時鳥の画をかきゆへ扇とせく毎ゐ声を發せ常則ゐ出る獅子の形と犬の見て吠かゝ成光ゐ繪る鷄ゐまことの鷄来て鬬るとゐるハゐ紀文の昔物語ゐてむるつゝ之ゐいつゝ油のあらゐ人るけれゐ真偽の区もゐぐつゝ。茲ゐ一勇齋光き筆法をゐるひてより、其名世ゐ高く、山柵城廓水軍の画法心ゐ浮むきとゐるせど、自ら其図ゐゐるひて、當世紙道の豪傑ゐ水滸傳の大利ゐゐゐひて、拾万貫の利を得んと書賈ゐ冊子需る事急をつゐる早馬の如し。画工ゐ樋定木の方寸ゐ及ゐて画割も出来ゐ余ゐ鈍筆をゐふるゐと小敵をゐて大敵ゐ向ゐひとゝと固辞ゐ江戸子根性ゐ負るゐきゐひのゐの強弓いちぐん當れと矢立の墨朝桜楼上ゐ遊ぶゐ筆をゐて真黒ゐるゐてゐるまゝ人ゐ

天保十二五年孟春發行　美圖垣笑顔

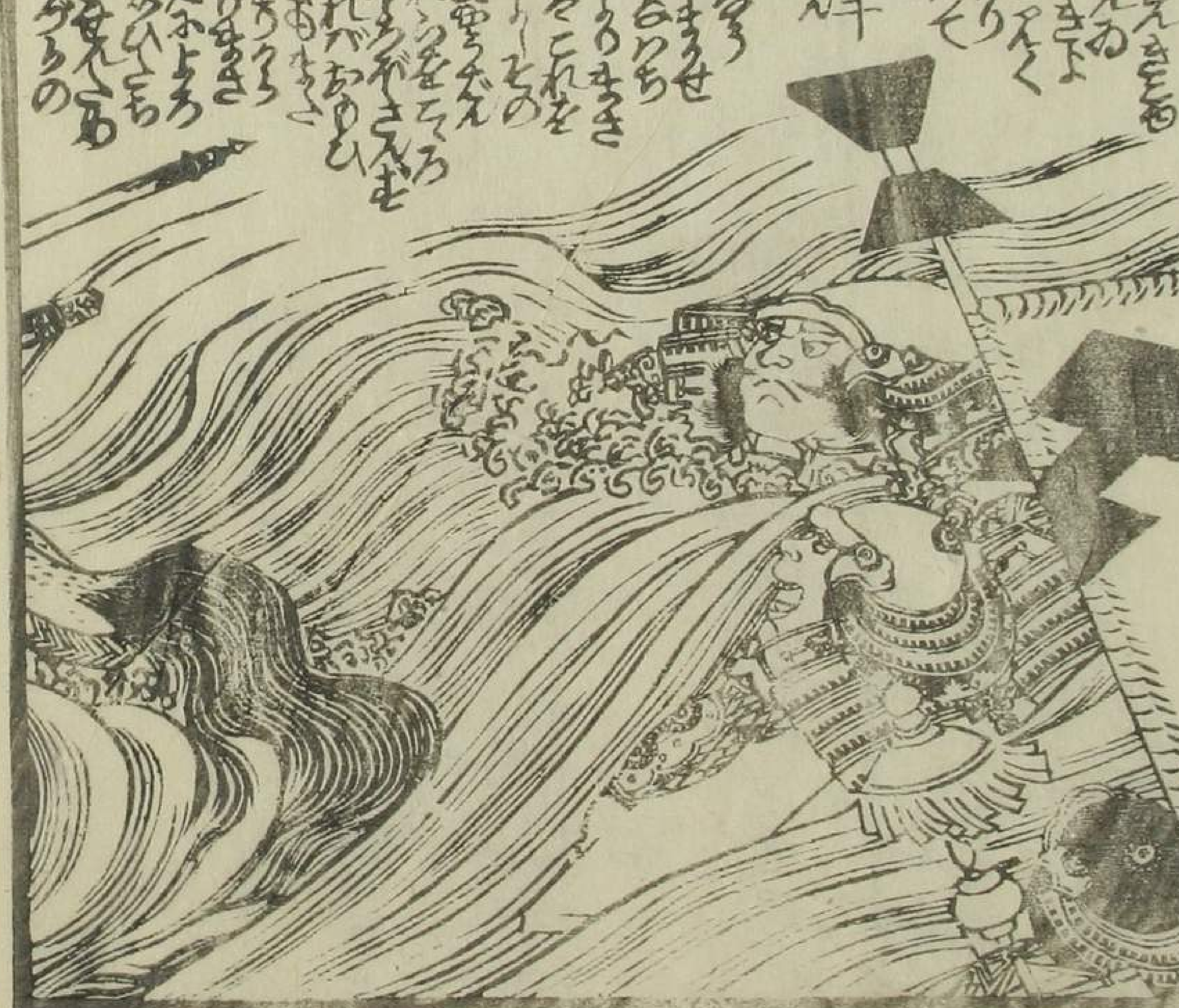
武蔵坊弁慶

牛若丸

服屋五郎

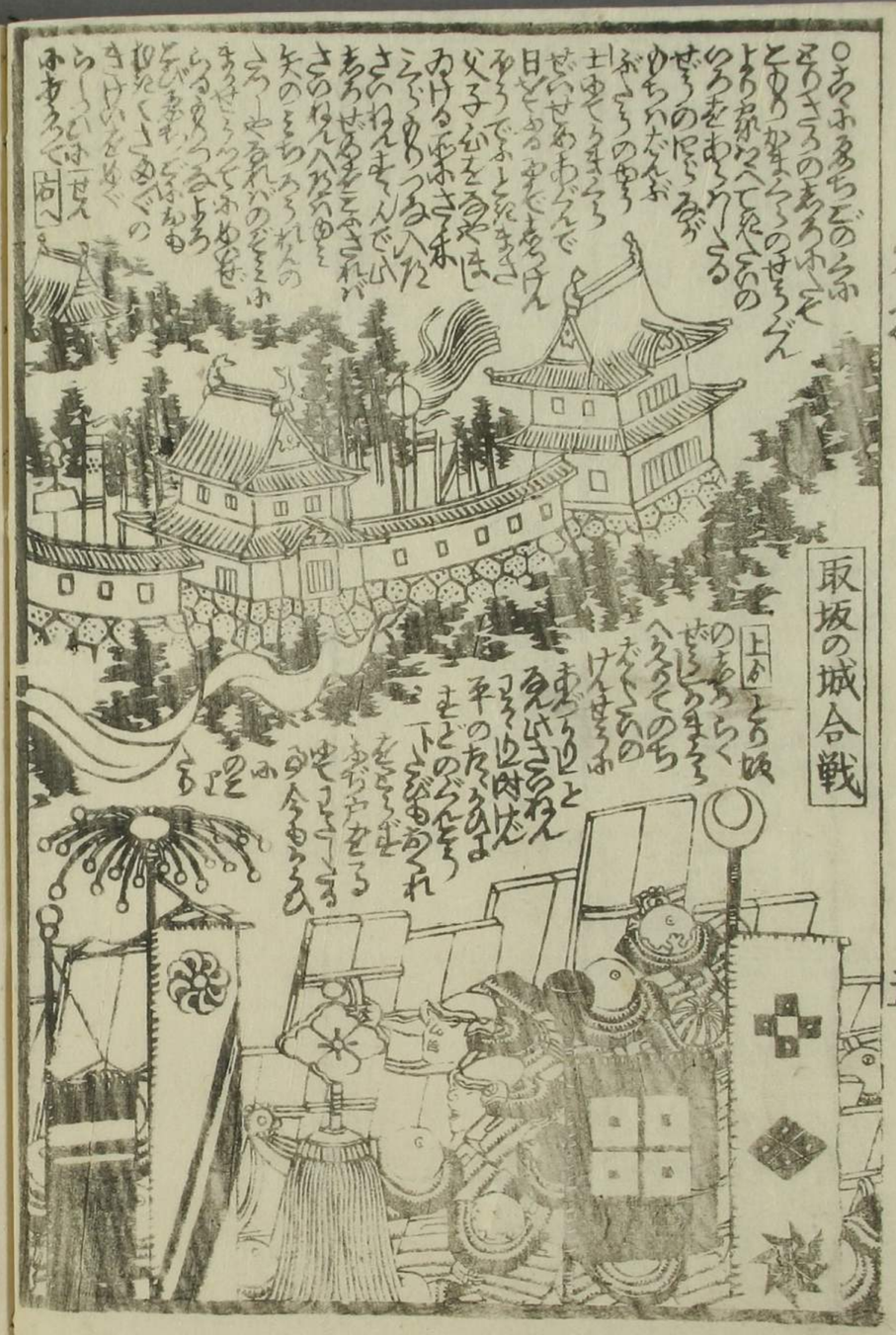


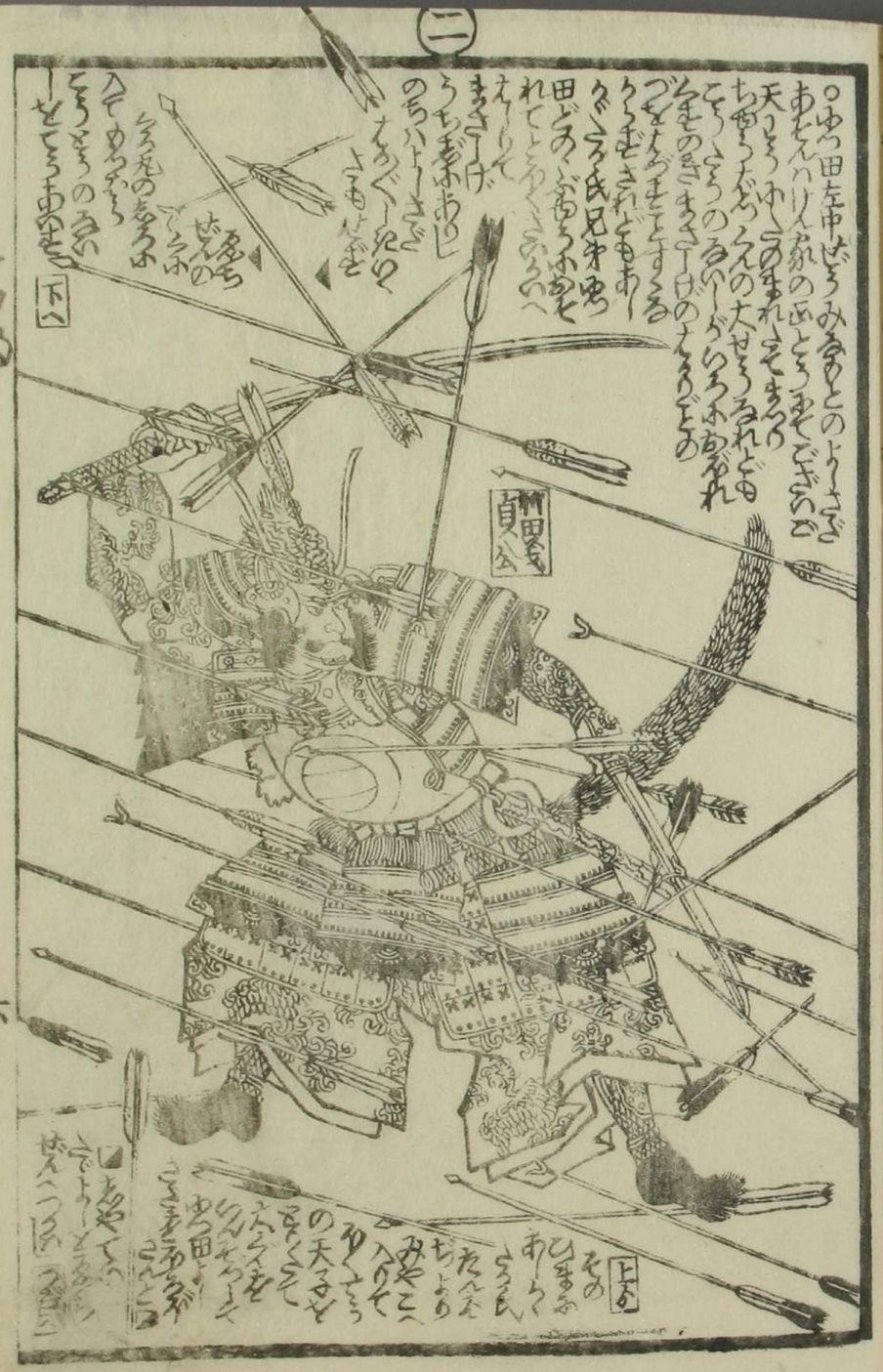
〔つぎへ〕ぎゑちうゆうぞうのそれをかのこきようろとあんきをも
そのうまれごちかうかるあうかゐぞくにとんゐ
あざむのまもり一門ひろくこともろのぐんきよ
ありをひきぬよりけげのやからをそく
ごしてきたのりかうぶまつのふるまひをなり
けれどもさかりのかならがめわつきなれるそ
されあつてとえむかのえし　そのころけげの
ぬとうくるけん三位よりまさハ仁平三年
さん多のつれのうちたをかくまてんてん
みんろくもおてうてそのうちにけくうの
ひとあわりそのけてうるくとふのかれあう
つとし、とあんかせんきあってせんれいにまつせ
ひさ目のこおんでをさりあとろべしとそまたいち
よりまさにめいせられてひやくさつとめくよのまさ
つゐのけてうそてあとしいうとどうかのえ兎をこれを
さこそうせしかそのけてちうれぬえとふめくよしその
ころひうかこさたくよりまさのあんせいのひまうぞれ
わうぢうとどうのみちくへきこのさとあまりこれをあてろ
よくうだなかのてこそ本ほそてよりまさを取りたまひ
とあんおとうにまさへびまへいるろうけりのさいれハあひ
うちにおれバなうめにはむかれてよりまさ二ほうとろう
これをさとす下よりかをさうらうげんとゝうふそかうて
日そのハまて平けかまずくきさんこ御れいたかさま
やがてまるうつのきそのまたしをうて大死ふよまき
こびこれと一八七十にあまびかくる大義をゆ、へちうぢ
あまあよこくのげんじ一とうかうことあげきえんて毛
あなりとそうあえのきんせえとありあげうこあうるの



せのとあつせきをそのきのうぢ川のきしにおんを
まちせんぞうをそくてよりすゝきくれてその大せいとまを
とれめふかくて平家の大ぐんおしろを
うつさをとうけてのぼうぢ川の
きしにおしよせ一がんせいにさをき
えしきぞうやまちのあれとき
るくきこさえとかおのあゆみ正ふ
下つけの國のぢうゆんあしかゞの
べつとう田原の又太郎とゝうる
とのめよしひでよとなのるちふ
きんとふ太刀を小わきにかゝへこみ
そこぞつんにどうくろがねのまるて
ぶらをきてうあのりぜ名ふたか
うぢ川のうぢまくおふのり入れてむかへ
きつとまさぶれかどまとたれて流を渡し
みるまあく入れもくろとのり入れてむかいの
きしへかけあがり一ぜんにうちかゝつてよりまさ
仲つな父子うちおとし、のくさいんあとおせまり
けりとされまつくとてつなかねちうぬのさきへふよれり
そもくひうぢ川をうちわたしたる一はいの又太郎
とつうまをたてゝめとをさえまてまゆかわちとのうち
あれどもくらでその名さうくきこえとつるがまへ
めのひとうせいかさするめの大さうきまれるり
さまことも武一せんのなんてきみえ武人せうぶのの
武のうぐんそうかいてまるべし

取坂の城合戦





朝比奈の三郎
高井の左衛門

和田左衛門の次郎

武蔵五郎貞世

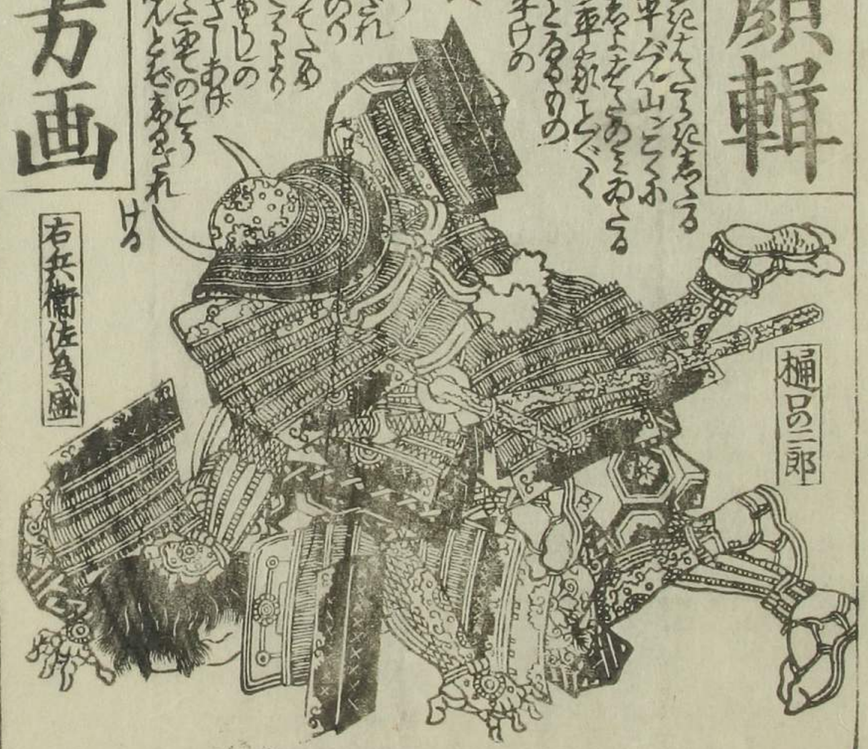
鳥海弥亖郎

権五郎景政

今井四郎

美圖垣笑顔輯

一勇齋國芳画



桶口の三郎

右兵衛佐為盛

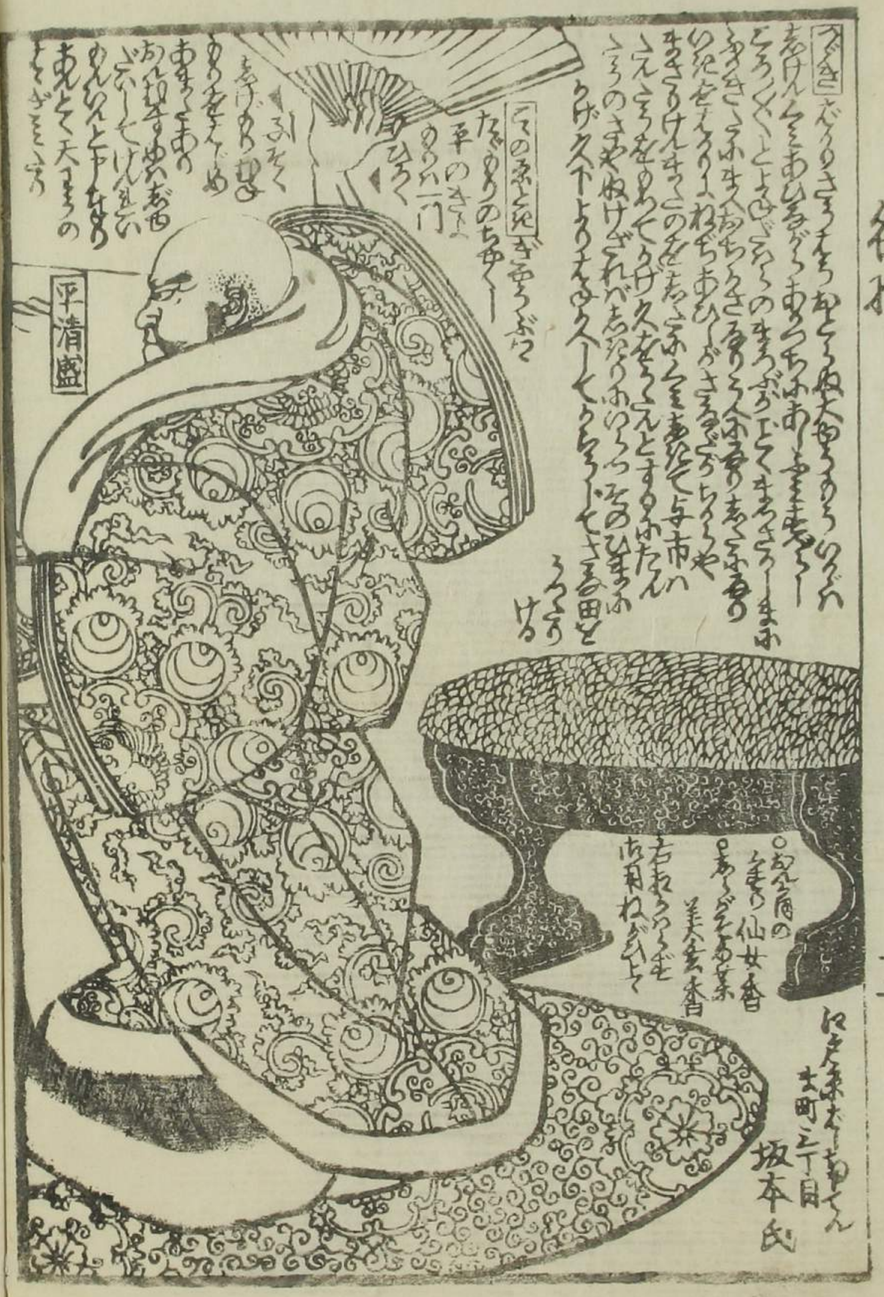
名將手鑑

下

二之
○九郎ようぶ
公ちゝ
ぜんけん
よりとも
ぎこのゆみ
ふふれ
ふまくら
ぐよりよりつぶ公
をあひくをそれ
よりきゆうと
ゆりかは
ぢをさぐ
めて
みあふ
ところふ
よりとも
よりこうそと
あてをさぐらぶぶ
次へ
義經公
靜御前
十一

遠
2378
254

真田与市
俣野五郎


平清盛
坂本氏

○木曾の中三郎の
ところへ使者が到すれば
今井の兵衛ひとりを
いのちをのがれんとせば
日せうぐんと仲公の
ものいひのことばをうけ
ひきゆくべしとの
ぶけいりゆく
ぐんれんれんとまくつせのと
たくひしがおうんつきそきそがうちち
まけぬうち考らこれくとうそ

巴御前

左右

こゝにて其人をめとり
あさひなのこゝろを
うかがせ一ぜ

つぎの系とき

九郎ぐんぐんぐんん
みるのとのように
公かそ

さのあ
でんぐんぐんぐんぐ
ぶあこう一の
ふてちろのか
こゝのさろあと
あるあけはりつ
せんやもあよぎを
とぐくふるる
とりのりるをふだ
よそのきりくら
さ義きの山八しま
だんのこゝろのふるのく
さるよーしてぶくぐ
ぐんせんを考きして
ぐーけるれのとのを
のりるようつの

こゝの人ひとりよう仲公と
あれのせんどをそと
ぶけてうちあわせを
やとおりのものをひろる
てををうちそしひきり
えんぐんてあるをおろる
あうぐがえんてきふる
とを内田のこゝとふ大
こうのりのうそかるを
ひとりとせまこりへやふ
ぐーうてで内田がのうぐを
ねがうきをそたらへをと
をけぐぐーこりのりのうふ
かをれけんちろぐーりのもるき
こゝろのふこのたろよーりの
あひきこれぐをもへのあ
こもれのまりをねてきあーて
うちくるをようりあるう
これをうけこうのこうのよねぢあふ
たりをせんけぐーこりんとあこりの
あそろうあこをふるのそけんぐーを
そのとをそこるふあそとのも今井の
ぼらもうちーぐふとのあるこるふく
あそけれぐをりへをとこるこるく西こそ
こおろくををつけりへてようーりり
こーてなけどりけりうくそりきをそてのち
とりへぐがもうんのこりををんとをとようーりり

右八

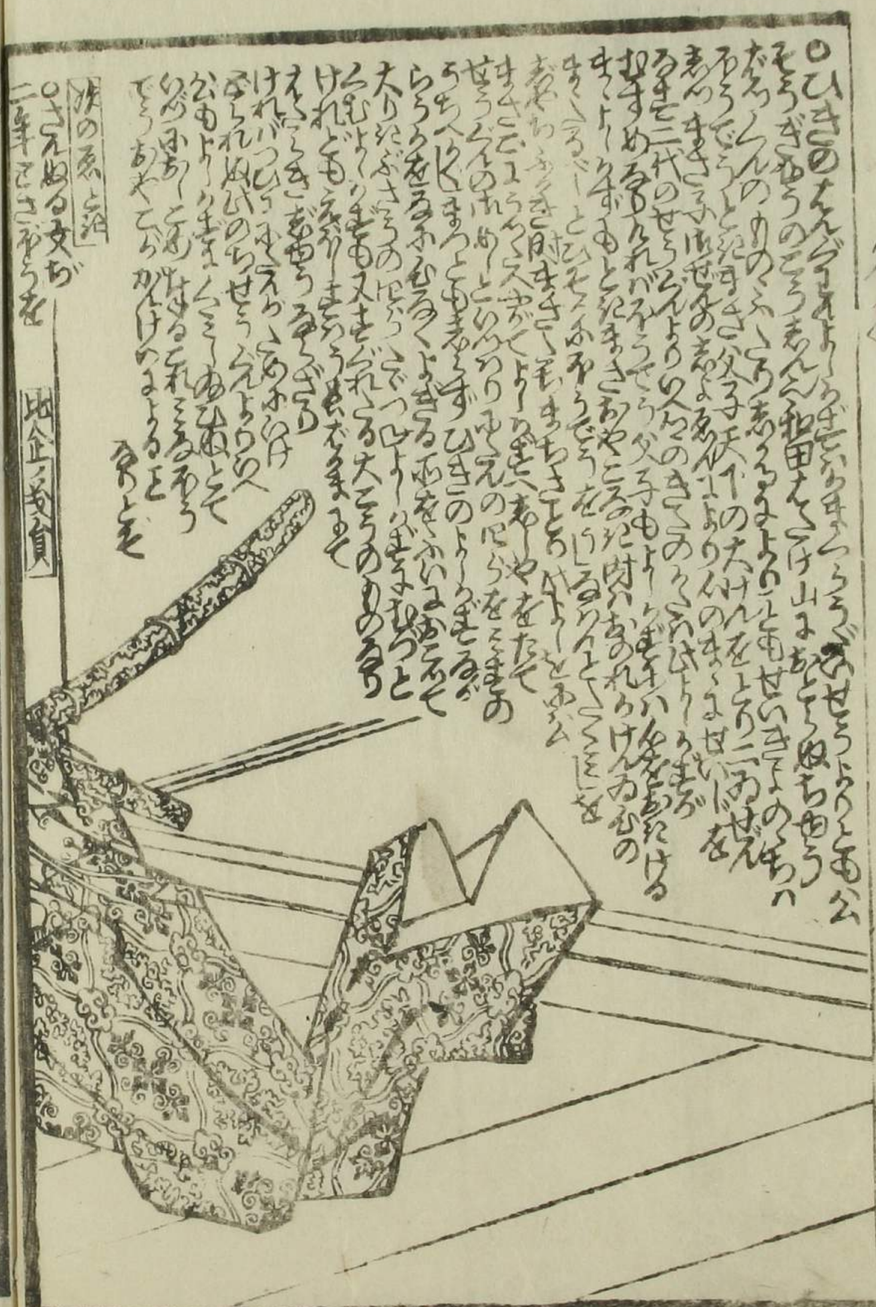
義經公
海内第一の補薬
仙方人参丹一ヶ十二文
加賀金沢 文海堂製

教経

合戦

梶原景季

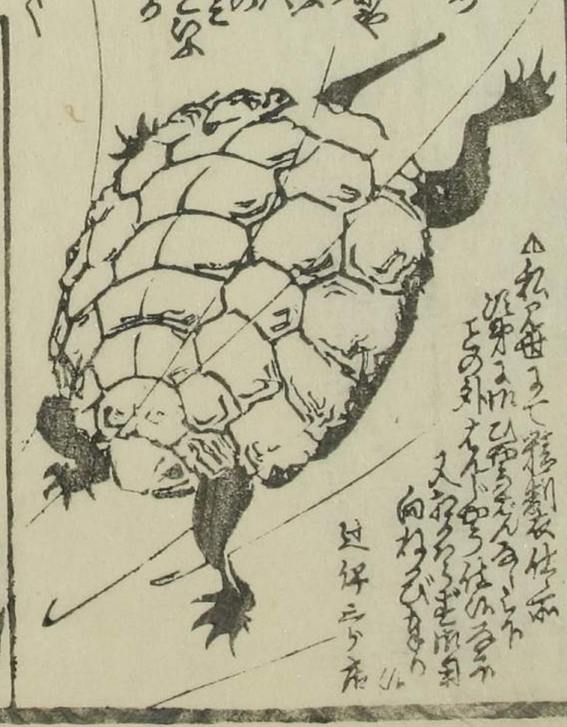
仁田四郎



衣川合戦

年慶

つぐき
もくれーの世の人の
まろうどとろんろどひとの
為朝

美圖垣笑顔茗

一勇齋國芳画